

ネパールにおけるネワール族女性の「新たな生き方」に関する文化人類学的研究 ー 女性自助組織「ミサ・プツァ」をめぐって ー

竹 内 愛

1 はじめに

カトマンズ盆地に住むネワール族は9世紀頃から18世紀半ばまでマッラ王朝を築いてきた人々の末裔であり、多民族国家ネパールの中で最も古くからの伝統を受け継ぐ人々である。カトマンズ盆地の3つの古い王都の1つである、パタンに居住するネワール族は、今まで、伝統的生活を厳格に守り続けてきた。旧王都パタンは盆地内の3つの有力な王朝の1つとして栄えた中世マッラ時代に完成した¹。現在のパタン市はその旧王都を中心に拡大しており、ネワールが人口の約80%を占める。

ネワール族は「ケガレ」を恐れ、浄不浄観で物事を捉える世界観を持っている。高位カーストほどケガレ観念を強く持ち、生活に規制が多い。例えば、女性はナチュネ（月経のケガレの期間）の間には、月経4日目の朝に清めの儀式をするまでは台所に入ることが出来ず、神へのプジャ（礼拝）をしてはならない²。ただし、この規範の日数はカースト集団、個人によって異なる。

現在でも、浄不浄観を基盤としたカースト制度は根強くネワール社会に浸透

1 マハラジャン 2002: 31 - 32

2 クシャトリヤ・カースト集団のひとつ「ゾーシー」に属する人からの聞き取りによる。なお、ネワール社会には「ケガレ」についての諸概念が多く、多くの面で見られる。山上によれば、アチュト（untouchable, 最下位カースト, 等）、アチョコ（不浄な、汚い impure, unclear, adulterated, 等）、アスツダ（impure, dirty, foul, immoral, unchaste, incorrect, 等）、ジユト（食べ残し、食べず残し, remains of a meal, impure food, 等）、ナチュネ（月経の、不可触の、monthly, untouchable, 等）、スタク（誕生に関するケガレ）、ポホール（汚物、卑わいな言葉, 等）、ビトゥロ（不浄な、汚れた、汚す impure, defiled, 等）、アウサツ（親族の誕生あるいは死によって生じるケガレ）などの諸概念がある（山上 2001: 112 - 116）。

している。高位カーストほど浄の存在とされ、低位カーストほど不浄とされる。そのケガレ観とカースト制度はマッラ王朝時代につくられたパタンの町の構造にも表れている。パタンの町の中心部に位置するダルバール（旧王宮）広場を「浄」とし、周縁を「不浄」として、同心円状にカースト別に住み分けをしているのである³。ネワール族は独自のカースト制度を持っており、カースト集団すなわち「ジャーティ」の数は30を超える⁴。カースト内婚（異なるカースト集団間の婚姻が禁じられる）を原則とし、カースト毎に習慣は非常に多様である。

ネワール族にはヒンドゥー教徒だけでなく、仏教徒が存在し、パタンには、ネワール族の仏教徒の多くが居住している。本来、カースト制度はヒンドゥー教と結びついた制度だが、ネワールの場合、仏教徒もカースト制度に組み込まれている。

カースト集団「ジャーティ」の内部では、「家族」と、「家族」が父系的に結びついている小規模の父系出自集団「プッキ」が日常的な共同の中心となる。「家族」は経済、儀礼から団欒に至るまで日常生活の多くの面での共同行動の基礎単位となり、また、「プッキ」は祖先祭祀や祭の際の宴会、あるいは成人式、結婚式、葬い、その他通過儀礼やあるいはある種の祭に際して家族ぐるみの招き合い、宴会を共にし、また、互いに死後の喪に服す⁵。また分裂して「プッキ」でなくなっても父系的関係があることがわかっている間は服喪義務など親族としての務めがあり、また、互いに連帯感をもつ⁶。現地調査によれば、

3 マハラジャン 2002 : 32-33

4 カースト制度は社会的身分制度である。「ブラーマン」（司祭、僧侶）、「クシャトリヤ」（王族、武士階級）、「ヴァイシャ」（平民・商人）、「シュードラ」（隷属民）の4つのヴァルナ（姓）に分けられ、さらにアウトカーストの階級もある。カーストとは上下に序列づけられた生得的、世襲的に帰属する階級である。現実のカースト制度は、もっと細かい集団である「ジャーティ」に分かれ、それが内婚の単位となり、世襲的職業を持ち、相互に区別される。ネワール族は独自のジャーティのシステムを持ち、各ジャーティはそれぞれ固有の苗字によって区別される。本論文では、カースト制度は主要テーマではないため、とくに区別する必要がない場合には、この「ジャーティ」を、より一般的な用語である「カースト」と表記して論じる。なお、ネワールにおけるカースト（ジャーティ）分類表を参考資料として、末稿に載せておく。

5 石井 1986:90-94

6 石井 1976:275-280

パタンでは、サットプスタと呼ばれる7世代の父系出自集団が、近い親族と考えられており、外婚単位になっている。

ネワール女性は、一般的に、夫と夫の家族及び父系出自集団につかえ、集団を再生産するために男児を産むことを期待される。女性は母親としての役割が人生の中で最も重視され、姑になるまではもっとも多忙である。そして、日常生活において女性は「家の掃除」、「洗濯」、「食事の準備」等の家事のほか、祭、儀礼においては、公的な場には出ないが、儀礼用具一式の準備をし、家庭での一連のプジャ（礼拝）を担う⁷。老年期の女性の役割は、家庭内では孫に対する祖母としての役割の他に、宗教的なプジャを取り仕切ることが大切なものになっている。その霊界に近い存在としての老女の力は冒しがたいものとして、自他共に認めている⁸。女性は嫁としては弱い立場ではあるが、男児を産むことで家庭で立場を認められ、さらに、姑になると嫁ぎ先での地位が上がるのである。一般的に、女性は社会的に男性よりも劣位に置かれており、非常に厳しいジェンダー構造が今なお残っている⁹。

しかし、近年、ネワール女性たちは自発的に団結し、パタン各地に「ミサ・プツァ」という女性自助組織を形成しはじめている。筆者は、女性たちがなぜ家から外に出て自助グループをつくったのか、また、それがネワール社会の中でどのように受け入れられているのかに大きな関心を持った。そこで、ネパールの一般家庭にホームステイして参与観察を行うとともに、いくつかのミサ・プツァのミーティングを訪れ、メンバーの女性たちから聞き取り調査を行った。

調査を進めていくと、ミサ・プツァは、最初はパタンの行政がNGOや国際NGOの援助の下に、パタンの行政が「開発」を目的にすすめたプロジェクトの一環として成立したものであることがわかった。その行政のミサ・プツァ養

7 ネワール族の家族は年齢で格付けがあり、振る舞いや特権が異なる。主婦は辛い仕事への力量によって価値が評価される。伝統的見地では女性は家庭の奴隷としての雇用である。家族が多ければ多いほど、女性は家族のために料理、洗濯や他の家庭の雑用仕事等、骨折り仕事が多い (Singh1988:419-420)。

8 山田, 小林 1997:267

9 これは、ネパールには依然として、女性の財産相続権に関する法律など、差別的な法律が数多く残ることが要因の一つでもある (Pradhan-Malla2000)。

成プロジェクトは1999年に終了した。しかしその後、パタンの女性たちは、「マイクロ・ファイナンス（小口金融）¹⁰をすることができる」などという噂を聞きつけ、声をかけ合い、自発的にミサ・プツァを再生させたのであった。

この新たに内発的に設立されたミサ・プツァは、社会開発の指標である「マイクロ・ファイナンス」、「職業訓練」、「エンパワーメント」などの視点から見ると、それほど大きな機能を果たしていないようであった。しかし、ミサ・プツァのメンバーは毎月のミーティングに積極的に参加し、とても生き生きしているように思えた。そのため、筆者はミサ・プツァを「開発」としてのみ捉えることに違和感を持った。そして、女性たち自身の視点から見て、ミサ・プツァはどのようなものであり、女性たちにどのような影響を与えているのかという点に関心を持った。

そこで、女性の生活世界に入りこみ、家族、親族、社会構造、宗教、儀礼、祭などの社会文化全般を理解し、また女性の内なる視点からの価値観を把握することによって、ミサ・プツァの実態やその意味が理解できるのではないかと考え、現地調査を進めた。関係者からの聞き取りによれば、パタンのミサ・プツァについては、これまで正式な形でなされた研究や報告は全くないということだった。本稿では、筆者自身による調査の結果を踏まえ、ミサ・プツァがどのようにしてネワール社会に受け入れられてきたか、その生成と発展の要因、その実際の組織と活動、女性たちにとってのミサ・プツァの意味、それが女性たちとネワール社会に及ぼす影響などを明らかにしたい。

2 ミサ・プツァの形成と発展

2-1 ミサ・プツァ形成の経緯

ミサ・プツァとは、ネワール語で「女性・グループ」を意味する。1990年

10 マイクロ・ファイナンス（小口金融）とは、低所得者向け小規模金融である。バングラデシュのグラミン銀行が始め、実施機関は世界中に広まっている。1960年代に「緑の革命」と呼ばれる米の高収量品種が導入されたときに、農民に化学肥料や農薬の導入と作業の機械化促進のため、政府主導で農業銀行や協同組合が設立されたのが発端である。1970年代には、貧困層の自立支援を目的として小口融資の活動が実施された。（HYPERLINK "http://www.ide.go.jp/Japanese/Ideas/Grad/wt_0408.html" http://www.ide.go.jp/Japanese/Ideas/Grad/wt_0408.html 2005,9,30 現在）。

代にパタンの南にあるヘタウダという町で、町をきれいにしようと女性たちが自発的にプラスチックごみを集めだしたのがそもそもの始まりである。そして、プラスチックごみを集めることでお金になることを知り、ヘタウダで活動が広がっていった。さらに、パタンにおける組織的なミサ・プツァは、1996年にCDS（コミュニティ開発局）が国際NGO、NGO等の援助を得て、パタンの貧困地区である11区、17区に都市の低所得層の女性たちを対象にして、ミサ・プツァを2つ養成したことに始まる¹¹。

1999年には都市経営計画（Urban Management Program）が、NGO、国際NGOの手助けによって実施された。このプログラムは、パタンの各家庭にトイレを設置すること、寺院を修復すること、女性の自立を支援することを中心としていた。そして、このプログラムの一環として、CDSはさらにミサ・プツァを5つ（4、9、13、14区に2つ）養成した。これらの区は貧しい低位カースト層が居住する地域である。

この1999年のミサ・プツァ養成事業を最後に、CDSは養成事業を終了した。しかし、行政主導のミサ・プツァの影響は残った。評判を聞きつけた女性たちが、マイクロ・ファイナンスや「地域にミサ・プツァをつくると識字トレーニングを受けることができる」などのうわさを聞きつけ、各地区で次々とミサ・プツァを設立し始めたからである（表1参照）。

このように、パタンでのミサ・プツァは最初の段階では、国際NGOや行政という外発主導の形で成立したのだが、次の段階として、パタンの女性たちは、内発的にパタンの各地区でグループをつくりだしたのである。現在（2006年10月）時点では、パタンに70以上のミサ・プツァがあるといわれているが、

11 パタンは行政的に22の区（Ward）に分けられている（図1参照）。区（Ward）はさらにトール（Tole）という下位の行政単位に分けられている。CDSとは、パタンの市役所の傘下にあるCommunity Development Sectionである。地域の社会開発に関わり、地域の寺院を修復したり、トイレを作ったり、ゴミ減量について活動を行っている。そして、女性自助グループであるミサ・プツァに様々なトレーニングを行っている。CDSはNGOの援助を受ける。例えば、GTZ（ドイツ開発公社 Gesellschaft für Technische Zusammenarbeit）のUDLE（Urban Development through Local Effort）プロジェクトの一環で、ミサ・プツァへの援助を行っていた。現在そのプロジェクトは終了している。また、CDS内には、子どものケアをするためのChild Development Centerがあり、現在、子どものためのグループ作りも実施している。

表1 ミサ・プツァの形成発展過程 (CDS 職員からの聞き取りによる)

1992 (2050 年)	CDS (コミュニティ開発局) 設立。
1996 (2054 年)	CDS がミサ・プツァ 2 つ養成 (11、17 区)。
1999 (2057 年)	Urban Management Program 開始。ミサ・プツァ 5 つ養成 (4、9、13、14 区に 2 つ)。
2000 (2058 年)	17、19、22 区に自発的にミサ・プツァが設立された。 CDS が市役所から独立した建物になる (建物は日本の大阪の NGO の援助)。
2004 (2061 年)	CDS のミサ・プツァ確認数が 45 となる。 18 ヶ月間の Clean Kathmandu Valley Program (JICA プログラム) 開始。 Health program (America United Mission による) 開始 (現在も進行中)。 Public Health Section ができ、18 区に 5 歳以下の子どもたちの無料診療室をつくる。
2005 (2062 年)	CDS のミサ・プツァ確認数が 54 となる (前年比 + 9)。 新しいミサ・プツァに運営するための 1 週間のトレーニングを実施。

表2 区 (ward) ごとのミサ・プツァの数

区	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13	14	15	16	17	18	19	20	21	22
ミサ・プツァ数	0	0	3	3	1	1	4	5	6	0	1	2	2	3	4	3	4	2	2	2	0	6

CDS もその数をはっきりとは把握できていない。表2は CDS によって把握されているミサ・プツァの区毎の数である。図1はパタン市街の地図で、地図上の数字は区を表す。

各ミサ・プツァのメンバー資格は、同地域に住む女性である。地域はカースト集団によって住み分けをしているので、原則的に、同じカーストに属する女性たちで構成されている。1つのミサ・プツァのメンバーの人数は30人から70人くらいである。

ミサ・プツァでは毎月各メンバーが1人50～200ルピーを持ちより基金をつくる。そして、メンバーは、この基金から必要な時にお金の融資を受けることができる。筆者が調査を行ったミサ・プツァではどこも、融資を受けるときの利子は10%であった。

また、ミサ・プツァは CDS からの金銭的な援助は今のところほとんどないが、CDS はグループの運営についてのレクチャーをしている。また、ミサ・プツァは、CDS から健康増進についての講義、市役所からの広報、集会、説明会を受けることができる。読み書きができない女性は無料で識字教育も受けること

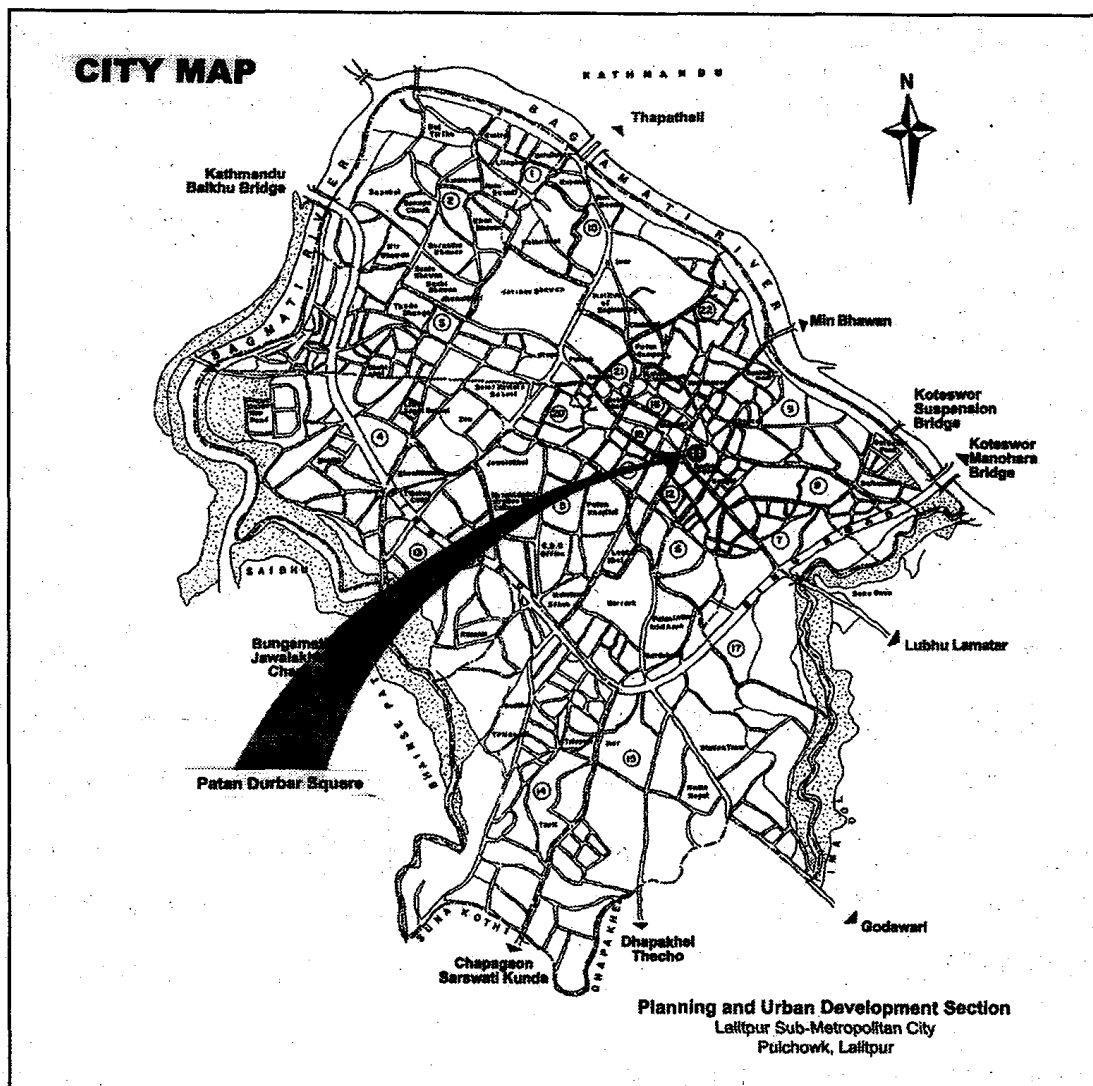


図1 パタン市の地図（パタン市役所発行）注：数字は区の番号

ができる。ミサ・プツァのこのような活動に対し、現在はパタン市の行政がバックアップを行っているわけである。

2-2 ミサ・プツァの行政との関わり

(1) パタン市の行政の取り組みの背景

ネパール政府は、女性問題を解決するために様々な方針を策定してきた。以下は、Acharya の報告である(2001:31-36)。政府は、「開発と女性(WID)」(Women in development) を、第6次5カ年計画(1981-1985)から開発政策のなかに明示するようになった¹²。第6次5カ年計画で、政府はあらゆるプログラムにお

¹² 伊藤、田中は以下のように報告している(1999:195)。ネパールにおける初の女性団

ける女性の参加を強調し、彼女たちの経済的エンパワーメントやニーズを満たすための特別なプログラムを提示した。そして、第7次5カ年計画でさらにこのテーマを広げた。第8次5カ年計画¹³では、政府は、開発において、女性に公平で意味深い参加をするように明言している。かすかな違いが強調されているが、第6次から第8次5カ年計画は、小規模収入産出、教育、トレーニング、女性への家族計画プログラムに焦点が向けられていた。そして、あらゆる法律の改正がなされ¹⁴、開発における女性参加を助長した。例えば、女性は第9次5カ年計画では、北京女性会議での行動要領に従い、女性の主流化、ジェンダー不平等の排除、女性エンパワーメントを目的とした。

ネパール政府は1992年に農業省に「女性農業開発局」、1993年には国家経済企画審議会のなかに「子ども・女性開発セクション」を設け、1995年にはネパールは北京女性会議での行動要領を採択し、「女性・子ども・社会福祉省」を発足させた。ネパール政府は行動要領を実行するため、画期的事業を成し遂げてきた。まず、国内で法律の改訂が行われ、行政、国際NGO、NGOがネパール各地で積極的に女性のエンパワーメントに乗り出した。1999年の地方自治法は、地域開発会議に女性の席を用意し、世界レベルで自治体全体において女

体の組織化は1950年の開国以前に遡ることが出来る。しかし、うまくいかず短命で終わった。その後の女性政策は、1960年からのパンチャーヤット体制のもとでは、議会に女性議席を割り当てられ、部分的財産権と離婚請求権を認め、一夫多妻婚の部分的禁止を謳う民法（1963年民法）も導入されて、一定の女性政策が見られた。しかし、それらは女性を「二流市民」の地位に留めるものであった。また、パンチャーヤット期には「ネパール女性機構」が政府の肝いりで組織され、「母親クラブ」、「母親グループ」といった、「母親」役割を強調するものが結成された。

- 13 第8次5カ年計画では、WIDに関する独立した章が設けられ、政府は、女性の段階的に平等で有意義な社会参加を促進するための措置に取り組むとしていた。これは、女性がより健康であるとともに、技術的な知識と収入を得て経済的にも自立する機会を与えようとするものである

(<http://www.undp.org.np/publications/beijing5/chap02.htm> 2005,9,25 現在)。

- 14 1990年の民主化後、採択した新憲法は、従来からあった政治的権利における男女平等のほかに、同一労働同一賃金を明記し、選挙においては各政党が立候補のうち少なくとも5%を女性とすることを義務付けた（114条）。さらに、1991年に女子差別撤廃条約を批准した（伊藤，田中1999: 198）。ネパール憲法（1990）にみる女性の権利は、男女共同参画社会の実現（4章7条）、政党は女性を選挙の候補として5%以上をたてること（17章114項）、などである。

性の代表が20%を占めるように言及するようになった。しかし、現在公務員98,681人中7,713人が女性であり、未だ7.81%に留まる。

(2) パタン市長からの聞き取り

パルバテ・ヒンドゥ系の市長は、2005年の調査時では任期2年目であった。以下はミサ・プツァに関する市長からの聞き取りの内容である。

「ラリトプール（パタン）では、コミュニティ開発局（CDS）を設立し、今から10年前から都市の貧しい女性のために役に立つ無料トレーニングを始めました。例えば、アチャール（漬物）やケーキ、パンの焼き方、服の縫い方を教え、女性たちが自分の店を出すことができるように手助けしています。洋裁はベーシックコースが6ヶ月で、さらに特別コースが4ヶ月の10ヶ月間コースを設けています。また、学校へ行ったことのない女性に計算や文字の書き方を教えています。このようなトレーニングをミサ・プツァへ呼びかけるようになりました。また、ミサ・プツァに対して行政が、グループ経営方法、貯蓄の方法、ジェンダーについてのレクチャーをしています。このような取り組みはラリトプールでしか行われていません。国からのサポートはありません。カトマンズからも時々トレーニングの視察に来ます。現在ミサ・プツァはラリトプールに約50あるといわれています¹⁵。その合計貯蓄高は400万～500万ルピーです。ミサ・プツァはネワール族だけのグループで、他の民族が入れていないということは知っています。しかし、ラリトプールの約90%はネワール族です。今のところ問題はないと考えています。」

(3) CDSの主要職員からの聞き取り

CDSの職員は全員女性である。主要職員は3人であり、3人ともネワール族のマハルジャン（農民カースト集団）である。ミサ・プツァのメンバーにはネパール語が話せない女性が多く、トレーニングを行うときにはネワール語で説明する必要があるため、スタッフは全員ネワール語を話すことができる。筆者は、CDS職員による1週間のトレーニングをタイナ（トール名）・ミサ・プ

15 2005年10月現在の数字。1年後の2006年10月には70以上に増加している。

ツァで観察した。CDS 職員は、まだ創立間もないタイナ・ミサ・プツァに「ジェンダー」、「ミサ・プツァの運営方法」、「マイクロ・クレジットの会計」についてのレクチャーを分担して行っていた。以下は、CDS の職員である S さん (30 歳) からの聞き取りの内容である。

「21 歳の時に大学を卒業し、22 歳から CDS で働くようになりました。最初は、若者ボランティアスタッフとして働いていました。今はこのスタッフ制度はありません。私はこの仕事を誇りに感じているし、女性の役に立っているのでもやりがいがあります。ミサ・プツァには色々な問題もあります。地域によって、低カーストで誰も教育を全く受けていない女性グループもあります。そのようなミサ・プツァはとても貧しいし、文字を書くこともままならないので、経営が大変難しいです。CDS がしっかりサポートしていかなければいけません。一方、ミサ・プツァをつくる必要もないような、教育を受けていてお金もある上流階級のミサ・プツァもあります。」

3 ミサ・プツァの活動とその意味

筆者は 2005 年 9 月のフィールドワークでいくつかのミサ・プツァを訪れ、その活動を観察し、メンバーにインタビューを行った。そのうち、「農民カースト」のミサ・プツァ 2 つと、「高位カースト」のミサ・プツァ 2 つを対照的な例として以下に記す。

3-1 農民カーストの活動

(1) プルチョーク・ミサ・プツァ¹⁶〈第 3 区〉

〈特徴〉

プルチョーク・ミサ・プツァは創立 3 年、メンバーは 38 人である。メンバーは全員がマハラジャン (農民カースト) で、農業従事者が多い。メンバーの年齢層は 30 歳以上で、教育を受けたことのない貧しい女性がほとんどである。

ミーティングは、毎月 1 日 (ネパール暦) に、プルチョークにある小学校の教室を借りて行われている。教室が借りられない場合には、リーダーの家で

16 プルチョークとはトール (区の下位区分) の名。

ミーティングを行う。このミサ・プツァは非常に団結力が強く、毎回のミーティングにはほとんど全員が出席し、互いに会うことをとても楽しみにしていた。ここでは、メンバーは毎月1人150ルピーずつ預金しており、1人2000ルピーまで融資を受けられる。

プルチョーク・ミサ・プツァの独自の活動として興味深かったのは、2005年10月24日に開かれた「ジャプ・サマーズ（マハラジャン社会）」第12回の集会で、初めてプルチョーク・ミサ・プツァがグティ（ネワール族独自の儀礼執行集団）とともに協力して手伝ったことである¹⁷。ジャプ・サマーズでは、今までグティがこの集会の準備をしていたが、町を掃除して、町中に旗をつけて飾り付けをしたり、食事の準備をしたり、来場者に花を渡した。このような事例からもプルチョーク・ミサ・プツァが社会的に認められつつあることが窺える。

〈ミーティングの様子〉2005年3月23日

ミーティングの時間に遅れると、罰金5ルピーを支払わなくてはならない規則があるので、全員時間通りに来ていた。罰則がない時は2～3時間遅れでミーティングが開始されることがよくあったという。ミーティングはまるで家族のような雰囲気、笑い声が絶えなかった。この日のミーティングは15時～18時頃までで、全員がとても楽しんでいるようであった。充分おしゃべりし終わると、メンバーは全員帰宅した。このミーティングは、筆者が参与観察したミサ・プツァの中で最も和やかな雰囲気であった。

〈メンバーからの聞き取り〉

リーダー：「ここプルチョークには6年程前、最初のミサ・プツァが作られましたが、それは数ヶ月でなくなってしまいました。誰の助けもなく10人で始めて、全員50歳以上でした。私も誘われて入りました。月に20ルピーずつ集めてやろうとしていましたが、会計能力のある人がいなかったのです。皆お金を出した時、私の出したお金はこれからどうなるだろうと不信感で

17 ラリトプール、カトマンズ、バクタプル、キルティプルにはジャプ（農民カースト）が一番多く、ジャプには「ジャプ・サマーズ（社会）」という大きな組織がある。そのジャプ・サマーズでは年1回ジャプ社会での取り決めやこれからの方針を話し合う集会が開かれる。今まで男性がその担い手であった。

いっぱいでした。それで、私はリーダーの女性にお金はどうなっているのか聞きました。それがきっかけで喧嘩が起こり、こんなミサ・プツァはいらないといって、そのときのリーダーはミサ・プツァをなくしてしまったのです。それから、しばらく何もありませんでしたが、行政の人からミサ・プツァを立ち上げないかと勧めがあって、2003年に教育を受けた女性に会計を頼んで、新しいミサ・プツァをつくりました。昔のリーダーはメンバーにはいません。」

会計担当メンバー：「私がプルチョーク・ミサ・プツァに入ったのは、夫の妹に頼まれたからです。私は日本に2年間留学して教育を受けていたので、会計をやってほしかったのだそうです。プルチョークには教育を受けた人がいなくて、運営が難しかったらしいのです。私はリングロード（パタン市の外周道路）の外に住んでいますからとても遠いのですが、自分の実家であることもあって、プルチョークのミサ・プツァに入りました。私は中心メンバーなので、ミサ・プツァのミーティングの前に、どんなことを話し合うのか、何をするのか等、中心メンバーだけでミーティングをします。ミーティングが多くて、忙しいです。でも、メンバーは面白い人ばかりで楽しいし、家族のようです。とてもやりがいがあります。」

〈聞き取り調査の分析〉（聞き取りによるメンバーの意識を表3にまとめた）

メンバー全員が30歳以上で、50歳以上の女性が13人であった。ほとんどの女性が家庭では姑の立場にいる。そして、結婚年齢については20人が10代で結婚していた。なかには、13歳で結婚した女性もいた。メンバーは全員とも既に子どもを産んでおり、男子を産んでいない女性は4人のみである。

夫に求めるものは「仕事してほしい」「稼いできてほしい」という金銭的なものと「健康でいてほしい」「一緒にいてほしい」という思いが強いようであった。また、女性たちの幸せは「家族と過ごす時間」にあるようだ。

マイクロ・ファイナンスをどのように使いたいかという質問には、「夫のために借りても良い」「家族に何か問題があったら」という回答が多かった。しかし、実際に借りた人は少ない。実際に借りた人は「子どもの結婚式のため」の資金だと答えている。

女性たちに共通していえるのは、女性たちの思いは、家族に幸せになってほ

表3 プルチョーク・ミサ・プツァのメンバーの意識

番号	年齢	結婚年齢	結婚方式	子ども	加入して良かった事	受けたトレーニング	家族の理解	夫に求めること	お金の使い道 (*は既に借りた場合)	今の生活の幸せ
1	39	17	見合い	女3	みんながおもしろいこと	肥料作り	有	夫は大工だが、私にお金をくれないこと。	3人の娘の結婚資金	家計が苦しいが、家族が一緒にいること。
2	37	18	見合い	男1女3						
3	59	19	見合い	男1女1	隣人と知り合えたこと。皆家族のようで嬉しい		有	ミーティングに行くなどいったりしないほしい。	*店のために借りた	夫が出稼ぎに行ってきた。2人で店を開けたこと
4	40	18	見合い	男3女3	グループで集まること	受けてない	有	仕事すること。家を建ててほしい	何か問題あったら	家族との時間
5	38	24	見合い	男2						
6	53	20	恋愛	男1女2	皆で冗談言って笑うこと		有	お酒を飲まないでほしい。	何か問題あったら	ミサ・プツァで親睦活動が出来ること。家族一緒にいること
7	43	25	恋愛	女3						
8	46	18	見合い	男1女1						
9	49	17	恋愛	男1女3	交流できること		無	叱らないでほしい。一緒にいてほしい	息子がしっかりしているから必要ない	息子の嫁が優しい。毎日食べれること
10	58	20	見合い	男1女4						
11	54	18	見合い	男2女2	交流できる	受けてない	無	健康で楽しく過ごす事	病気になったら	夫が優しい
12	52	15	恋愛	男1女1						
13	32	10	恋愛	女2						
14	55		見合い	男1女2						
15	55	13	恋愛	男1女5						
16	35	19	見合い	男1						
17	57	19	見合い	男2女1	融資		有	稼いでほしい	新しい家を作るため	家族の健康と平和
18	51	18	見合い	男2女1	皆と仲良くなったこと		有	健康でいてほしい。結婚当初は何を一緒にしても恥ずかしかった	家の問題が起きたら	家族の健康と平和
19	42	20	見合い	男1女3	皆と仲良くなったこと、遠足行ける事、貯金	受けていない	無	家事を手伝ってほしい。家を建ててほしい	*息子の結婚資金	息子が大学に行っていること。家族一緒にいられること
20	65		見合い	男1女4	トレーニング受けられた	プラスチックのリサイクル	有	死亡	家庭に問題が起こったら	息子がしっかりして、お金に問題がないこと
21	32	18	見合い	男1女1	貯金が出来ること		無	怒らないでほしい	夫のために使ってもいい	
22	30	26	恋愛	男1	皆と仲良くなったこと	会計トレーニング	有	歌手として有名になってほしい	夫のために使ってもいい	家族でいること
23	33	22	見合い	男2						
24	52	18	見合い	男1女3						
25	35	21	恋愛	男1女1						
26	54	17	見合い	男2女3	近所に知り合いができた。	受けていない	有	タイヤの仕事をしているが、仕事中でも食事に帰ってきてほしい	子どもがしっかりしているから借りる必要はない	ミサ・プツァで年齢を越えて皆で相談できること
27	30	26	恋愛	女1	皆と知り合えたこと		有	自分のことをわかってほしい	借りない。みんなのためになればいい。	子どもと遊ぶ時間
28	53	18	恋愛	男2						
29	47	18	見合い	男2女2	貯金できること。皆と知り合えたこと	アチャール、コンボスト。	有	仕事をしてほしい	仕事するために借りたい	夫、子どもの顔を見られること
30	42	24	見合い	男2女2						
31	40	19	見合い	男1女1	家の外で学べる。夫が死んだが、貯金が出る	プラスチックリサイクル	無	死亡	嫁ぎがないから小さな店を開きたい	夫が死んで悲しい。将来不安
32			見合い	男1女1						
33		20	見合い	男2女2						
34			見合い	男1						
35	46	20	恋愛	男8女1						
36	40	17	見合い	男1女1		受けていない	有	不満は全くない	*娘の結婚資金	夫の理解がある
37	31	24	恋愛	男1女2						
38	34	22	恋愛	男1						

しい、そして、家族と一緒に平和な時間を過ごしたいという点で共通していた。ミサ・プツァに入って良かったことは、近所に住んでいながら、今まで話したこともなかった女性たちと知り合う機会ができたことだという。多くの女性が、今ではメンバーたちと家族のようになり、色々相談できて楽しいと話した。女性たちはミサ・プツァを通じてメンバーと知り合い、家庭とは別の仲間たちとのネットワークによる新たな大切な世界が生まれているようだ。

(2) ヤムピストゥーパ・ミサ・プツァ¹⁸〈第22区〉

〈特徴〉

ヤムピストゥーパ・ミサ・プツァは創立3ヶ月である。メンバーは35人で、全員がマハラジャン(農民カースト集団)である。ほとんどの女性が学校に通ったことがなく、人々の一番の関心事はネパール語の読み書きであった。ミーティング場所は地域のグティの建物を借りている。ほぼ全員が農業従事者で、昼間は忙しいので、ミーティングはいつも毎月1日の夜8時からしているという。子どもを負ぶって参加しているメンバーも2人いた。建物の前には見物する男性や子どもたちが珍しそうに覗き込んでいた。グティの建物横には鶏がたくさんおり、田園風景が広がっていた。ヤムピストゥーパ・ミサ・プツァでは、毎月1人100ルピーずつ預金する。創立間もないので、グループ基金の貯蓄高はほとんどまだなく、融資受付開始時期は未定である。

〈ミーティングの様子〉2005年10月2日

筆者はCDS職員とともに、ヤムピストゥーパ・ミサ・プツァの最初のミーティングにCDS職員と一緒に訪れた。時刻は17時頃であった。最初のミーティングなので、自己紹介のトレーニングが行われていたが、女性たちは恥ずかしがって、なかなか口を開くことができなかった。全員が名前と年齢を言うだけの自己紹介にも1時間程かかった。その後、CDS職員が「自分のミサ・プツァにプライドを持つこと」、「考え方の違う人を認め合って協力して活動すること」等、活動について指導した。

〈メンバーからの聞き取り〉

18 エムピストゥーパ・ミサ・プツァはクンベシュワール・トールにある。

リーダー「私はこのミサ・プツァをつくったのは自分が市役所の女性トレーニングでミシンを教えていて、自分の実家のそばにミサ・プツァをつくる必要があると思ったからです。最初は何人かに声をかけましたが、全然興味がないようでした。しかし、今日の夜8時に集まろうと呼びかけた時に35人の女性たちが集まっていて、本当に驚きました。皆家族の賛同を受けてからやってきたのです。このミサ・プツァは3ヶ月前にできあがりしました。リーダーである私以外は全員マハラジャンです。私たちのミサ・プツァは毎月1日に夜8時からミーティングをし、月100ルピーずつ集めています。ほとんど全員ネパール語が話せません。女性たちの第一の希望は勉強することです。お金を集めるよりも何よりもネパール語の勉強に興味があって、早く始めてほしいと言ってとても楽しみにしています。」

3-2 高位カーストの活動

(1) タイナ・ミサ・プツァ¹⁹〈第12区〉

〈特徴〉

タイナ・ミサ・プツァは創立1年6ヶ月である。現在、メンバーは75人で、その内訳は、69人がサッキヤ（仏教徒で、仏像、タンカを描く職人カースト集団）で、3人がマハラジャン、3人がシュレスタ（武士カースト、かつて王に仕えていた）である。タイナ・トールは仏像をつくる職人の町である。このトールにはサッキヤが多く居住する。そして、学歴の高い教養のある女性たちが多く住んでいる。タイナにはいくつかアパートがあり、そこに他の民族の人が何人か住んでいる。今のところ他民族のメンバーはいないが、もしも、ここのミサ・プツァに入りたければ、マイクロ・ファイナンスは参加してもいいが、宗教的な行事には参加してほしくはないとリーダーは話した。

タイナ・ミサ・プツァの創立当初は、出資金は1人あたり月5ルピーであったが、2005年10月からは、毎月100ルピーを収集することになった。今のところ、ミサ・プツァ基金の貯蓄高は小さいが、タイナ・トール・スダルサミティ（男性のグループ）から融資の支援をしてもらい、5000ルピーの融資を受ける

19 タイナとは、トール名である。

ことができる²⁰。

創立当初、ミーティングはチョーク（回の字型集合住宅）の中庭にゴザを敷いて行われていた。しかし、現在はあるメンバーの家の1階を借りて行われている。ミサ・プツァのミーティングの後には、必ずティータイムがあり、ビスケットとチャ（ミルクティー）を飲みながらおしゃべりする。メンバーは忙しい女性が多く、実際にミーティングに来るのは20人～30人程である。

タイナ・ミサ・プツァの独自の活動は、月に1回宗教の説教を聞くことである。これは、ネワール仏教のグバジュ（司祭）、仏教のラマ僧など、1つの宗教に限らず招いている。説教を聞くことをメンバーはとても楽しみにしている。また、祭の時にはメンバー全員でネワール料理店を出すことにしている。

〈ミーティングの様子〉2005年9月28日、10月5日

9月28日のミーティングでは、CDSから感染症に関する指導があり、女性たちに理解しやすいように、1時間のテレビドラマで病気の恐ろしさを伝えていた。メンバーたちはそのドラマを真剣に見ていた。

ここのミサ・プツァでは9月29日から10月5日までの7日間、毎日、1日3時間、CDSによる「ミサ・プツァ経営トレーニング」を受けることになっていて、筆者は最終日の10月5日のトレーニングに参加した。

トレーニングの最終日ということで、女性たちは全員がユニフォームのサリーを着て、その連帯感を表していた。最終日にメンバーは、感謝の気持ちとして、CDS職員を囲んでティー・パーティを行った。

〈メンバーからの聞き取り〉

リーダー「私は大学まで教育を受けて、ホテル経営している夫と結婚し、幸せに生活しています。しかし、自分だけ幸せになるのではなく、タイナの女性たち皆のために何かしたいという思いでミサ・プツァをつくろうと考えました。

20 約10年前から、パタン各地では、同世代の友人同士、または、地域の人々が集まって共同貯金をする男性グループができ始めた。グループのその人数や規模は非常に様々である。ミサ・プツァとは違って、ミーティングでの話し合い、トレーニング・教育を受けることは一切なく、共同貯金だけが目的で行われている。預ける金額は自由で、高額を預けるので、基金は大きいという。行政からの支援は受けていないという。

女性たちを自立させてあげたかったし、困ったことがあったら皆で相談できる場を作りたかったのです。家族からの反対は全くありませんでした。夫は海外でも商売をしているので、古い考え方ではないのです。ミサ・プツァは他の地区にすでにあることを知っていましたし、教育を受けているタイナの女性たちに声をかけ、最初は10人で始めました。市役所の助け無しで、1年半前、自分たちで始めたのです。それから家を訪ねて主婦たちに声をかけました。徐々にメンバーを増やし、75人になりました。ミサ・プツァをつくってから1ヵ月後にCDSに届けを出しました。半年後には、色々なプログラムやトレーニングの招待状が届くようになりました。」

メンバー「私がこのミサ・プツァに入ったきっかけはリーダーに誘われたからです。彼女は女性たちのグループを作りたいけれど、教育を受けている人に手助けしてもらいたくて最初に何人かに声をかけていたのです。」「ミサ・プツァの目的のマイクロ・ファイナンスについては、本当はお金を集めるのは自分でやればいいことだと私は思います。皆でやると、一部の人たちに負担がかかります。その人たちはもちろん給料はもらえません。暇でないとこのシステムは成り立ちません。ちょっと教育を受けている人ならば、今のマイクロ・ファイナンスは必要ないのではないのでしょうか。」

(2) ヒランニャ・ミサ・プツァ〈第16区〉

〈特徴〉

ヒランニャ・ミサ・プツァは創立3年である。メンバーは21人である。ヒランニャ・トールにはサッキヤ、バジュラチャリヤ（仏教徒司祭カースト）が多く居住する。そして、教養のある女性たちが多く住み、息子や娘を日本やヨーロッパに留学させている女性も2人いた。メンバーは香づくりやアチャールづくり、プラスチック再利用などの家庭でできるトレーニングをもっとたくさん受けたいと話し、トレーニングに関心が高かった。メンバーの1人の家を訪ねていったところ、楽しそうに香づくりをしていたのが印象的であった。どちらかというと、職業訓練というよりは趣味であった。

メンバーは全員ヒランニャに居住しており、結婚しているか、20歳以上で

あることが条件となっている。年齢層は23歳～65歳である。そのうち15人が大学を卒業しているが、6人はネパール語を話すことも文字を書くこともできない。メンバー中4人はまだ若く、独身である。中心メンバーは9人で役員は3年で交代となっている。ヒランニャには他に15人の女性が居住しているが、家族の反対から加入できないという。

毎月20日にミーティングがあり、月200ルピーずつ集めている。ここでは、総額20万ルピーを貯蓄している。基金から、メンバーは利子10%で、2,500ルピーまで融資を受けられる。融資を受けた女性は今まで6人いた。融資を希望する理由は自分の店を持つ投資のためなどであった。生活が苦しくて融資を受けたいという人は今のところいないという。

ミーティングはパタンのゴールデン・templの裏にあるヒランニャ・コミュニティ図書館で行われている。図書館といっても、本棚が1つと大きなテーブル1つがあるだけで、コミュニティの会議などをするためのものである。ここはミーティングがない時には閉めてしまう。ミーティングに遅れてくると罰金を5ルピーずつ徴収されることになっている。

ヒランニャ・ミサ・プツァの独自の活動として、週に1回金曜日の夕方に、2時間ヒランニャ・コミュニティ図書館前でバザーを開き、スナック、チップス、アチャール、キャンドル、香、ヌードル、プラスチックのたわし等を販売している。当番制で4人ずつ店の仕事を受け持つ。しかし、バザーの存在はメンバー以外にはほとんど知られておらず、現状では、メンバー間で商品を購入し合っている。

〈ミーティングの様子〉2005年10月6日

筆者の訪れた日は、ダサインの期間中で、女性たちは忙しく、ミーティングは集金するのみであった。このミーティングは夕方5時～5時半までであった。全員椅子に座り、メンバー同士少し歓談していた。集金方法は、会計係がメンバーの持っている手帳に受け取りのサインを書き込み、ミサ・プツァの帳面にも記載しておくというものである。

〈メンバーからの聞き取り〉

リーダー「私は1年前からこのミサ・プツァのリーダーになりました。以前の

リーダーは忙しくて辞めてしまったので、私が引き継ぎました。私は大学院マスター・コースまで進み、現在結婚しています。リーダーをしていることに関して家族の反対はありません。」

3-3 ミサ・プツァの包括的活動 「ミサ・プツァ大会」

筆者は、2005年4月、年4回CDSで開かれるミサ・プツァ大会に参加した。このミサ・プツァ大会では、各区からミサ・プツァの中心メンバーが2人ずつこの大会に参加することになっている。そこで、各ミサ・プツァのメンバー内で番号をつけ、違うミサ・プツァの同じ番号の人同士が集まって、スタディ・グループをつくり、2日間一緒に行動する。くじ引きで、「食事の準備」、「茶会の準備」、「片付け」、「発表」の4つのグループに分かれ、彼女たちは一日中、共同作業をする。特筆すべきことは、ここではカーストを超えたグループがつくられて、共同作業をすることである。

これは、ネワール社会では伝統的な規範からの逸脱とみることができる。現在でも、高位カーストに属する者は、低位カーストの人から水、食物を受け取れないという規律があり、一緒に食事をするなど絶対に許されない。(筆者のホームステイ先の姑は、お手伝いさんに飲み物、食事を与える時には、触れると穢れるため、手渡しではなく、床に置いていた。)しかし、このミサ・プツァ大会では異カーストで構成されるグループづくりが行われていて、問題も起こらなかった。CDSがこのようなスタディ・グループをつくったことで、彼女たちの伝統的価値観をも乗り越えようとしている。

筆者はこのことに関して驚きを覚えたが、「なぜ」という質問を発することで、そのような新しい試みを阻害してしまうことを恐れたため、聞くことができなかった。しかし、意識の変化がここにみられたのは確かである。このような活動を通して、女性たちの活動によってカースト社会を少しずつ変化させていくことになるのではないだろうか。

4 考察

4-1 内発的ミサ・プツァの形成発展の要因

近年、パタンでミサ・プツァが発展してきた背景は、外的要因と内的要因に大きく分けられる。

外的要因としては、まず直接的な要因として、NGO、国際 NGO や行政が主導する「開発プロジェクト」があげられる。このプロジェクトでつくられたミサ・プツァは、現在のミサ・プツァの原型となり、後の内発的な新たな組織を生み出すきっかけとなった。もう1つは、世界的な女性の自立についての外部からの情報の浸透である。その中には、過激派組織であるマオイストが盛んに男女平等をうたっていることも含まれる²¹。

内発的要因としては、まず、第一に、現代の若い女性には「学校教育」を受けた者が多く、伝統にとらわれない生き方への憧れや、知識や教養を身につけることへの欲求が強まりつつあることである。従来、母語はネワール語で、民族語だけで育ち、ネパール語の読み書きだけでなく、話すこともできない女性が多かった。従来は許されなかったけれども、彼女たちは勉強したいのである。そのような、抑えられていた欲求を実現させることができるミサ・プツァは女性たちのニーズによく適っている。

パタンにも「学校教育」を受けた女性が増えてきたが、とくに「高等教育」を受けた女性の存在がミサ・プツァのような組織の育成に大きな役割を果たした。とくに農民カーストの場合、開発プロジェクトによって形成されたミサ・プツァは、メンバーの会計能力の欠如によって失敗した。新しく内発的につくられたミサ・プツァでは、「高等教育」を受けた女性が「キーパーソン」となって、ミサ・プツァを成り立たせているのである。

さらに、ミサ・プツァの急激な増加の背景として、パタンの町で「核家族化」

21 1996 年前後から共産党主義過激派組織であるマオイストが、王制の廃止、共和制国家の確立及び社会主義経済社会、男女平等を謳い、全国的にテロ活動をしてきた。このマオイストによる活動と主張は、ネパール社会に影響をもたらした。マオイストの軍隊は男女対等で、政府に対してさまざまな女性の権利を求めている。そのことから、ネパール政府も女性の地位向上に力を入れざるをえなくなり、法改正をしたり、国軍に女性を入れることになった。

が進んでいることもあげられる。伝統的価値観では兄弟が結婚後も同居する大家族が同じ家に住むことが理想とされ、女性たちの生活は、主にその範囲内で生活してきた。また、祭や儀礼を契機として、父系出自集団内の結びつきが強かった。既婚女性たちは、嫁ぎ先と実家との間を往復し、双方の親族の範囲内が主な生活圏であり、付き合いの範囲としてきた。しかし近年、核家族化の傾向にあり、家庭から出ない女性の生活圏は一層縮小し、非常に狭いものになってしまった。さらに、核家族化することで、親族間の相互扶助が減ったのだという。ミサ・プツァへの加入によって、女性たちは生活圏を拡大し、隣人と友人関係を築き、相互扶助の新たなルートを得ている。つまり、その点でも、ミサ・プツァは女性たちのニーズに適ったと言える。

4-2 ミサ・プツァの活動とその意味—女性たち自身の視点から

ミサ・プツァは地域毎に組織されている。パタンはカースト集団によって住み分けられているため、各ミサ・プツァは基本的に同カーストによって組織されている。そのため、ミサ・プツァごとの特徴やニーズや活動は多様である。

ミサ・プツァの活動を表4にまとめた。ミサ・プツァの役割は主に6つ挙げられる。まず、聞き取り調査でわかったのは、女性たちがグループに入ってよかったと感じることは、ほとんどの女性が「親睦」の面についてであった。ミサ・プツァに入って、近所に友達ができた、皆で集まっておしゃべりできる、メンバーは家族のようで、悩みを相談できる等と話していた。ミサ・プツァができたことには本当に感謝しており、ミーティングには、預金するより何よりも皆に会いたいから出かけると彼女たちは言う。実際に、ミーティングに集まる女性たちはとても嬉しそうで、生き生きしていた。実家と嫁ぎ先の往復だけであった女性の生活圏が、この新たな人間関係を通して、新たな「生活世界」に広がったからである。

2つ目は、「マイクロ・ファイナンス」の活動である。多くのミサ・プツァはできてまだ2、3年しか経っていないし、月々の掛け金が1人100～200ルピーという小口であるので、グループ基金は小さく、融資金額も2000～3500ルピーまでだという。どんなことに融資してもらいたいのか尋ねたところ、家を建て

る、仕事を始める、医療費、子どもの結婚資金等の回答をメンバーから得た。しかし、女性たちの多くはあまり積極的に融資には期待していなかった。女性たちは辞める時にお金を返してもらえる貯金のつもりで行っており、「マイクロ・ファイナンス」と呼べるような段階にはまだ至っていない。むしろ、ミサ・プツァのメンバーでいるための会費のようなイメージであって、今のところ、本来の機能ができていないとは言えない。

3つ目は投資である。筆者が訪問したミサ・プツァの一つで、ヤギを1頭購入して村に預け、子ヤギが生まれたらその利益をミサ・プツァが受け取ることができる仕組みを持つ例があった。このような投資によって、グループ基金を増やす活動もわずかながら行われている。

表4 ミサ・プツァの活動

ミサ・プツァの役割	女性たちの活動例	女性たちへの影響
親睦	ミーティング、茶会、遠足、日常的付き合い	相互扶助(精神的、労働サービス)
小口金融(マイクロ・ファイナンス)	家を建てる、仕事を始める、医療費、子どもの結婚資金	相互扶助(家計援助、仕事を始めるため)
投資	ヤギを所有する	営利活動
トレーニング	識字、計算、お香づくり、蠟燭づくり、牛乳ビニルパック・リサイクル(たわしづくり)、アチャール(漬物)づくり、きのこづくり、園芸、ミシン、美容師	教養を身につけ、自分に自信を持つ。また、趣味につながっている。
広報	保健衛生、伝染病、ごみ問題、リサイクル、生ゴミコンポスト	家庭で実践し、社会貢献
社会的共同作業	祭でのバザール、ミサ・プツァ大会	社会進出、女性のカースト意識改革

4つ目に、女性たちにとって大事なことはトレーニングである。トレーニングも地域によって、個人によって需要が異なる。あるメンバーは習った香づくりを熱心に行っていたが、その姿はそれをつくって商品にするためというよりは、自分の趣味という感じで楽しんでいた。開発におけるトレーニングの目的

は雇用機会を作るための女性のエンパワーメントなのだが、実際は習い事と捉えている女性たちが多い。教育を受けたことがない女性も多く、彼女たちの学ぶ意欲はとても強かった。彼女たちは教養を得ることで、自信を持つことができたようであった。

5つ目は、ミーティングの機会に市役所からの広報によって、リサイクルや生ゴミコンポストの利用方法を学ぶことである。女性たちは、家に帰り、ミーティングで教えてもらった方法でゴミを減らし、社会貢献を果たすことになった。これまで、女性たちは家族や親族との結びつきしかなかったが、このような活動によって、女性たちは自分が社会と直接結びつき、社会貢献しているということに誇りをもつことができた。

6つ目は、地域のヒンドゥー祭などの機会にネワール料理などのバザーを開いたり、毎週、町角でバザーを開いたりするなどの、社会的共同作業を始めたことである。女性一人ひとりが役割を持ち、グループの一員として、公的な場で仲間とともに共同作業を行うことは女性たちの喜びであり、自信にもつながる。

ミサ・プツァの活動とその意味は、カーストによって異なる。とくに高位カーストと低位のカーストでは相当異なっている。傾向として、農民カーストのミサ・プツァのメンバーは、「ネパール語の勉強」に興味を持っている。また、融資を受けるならば、子どもの結婚資金、医療費などの生活費に充てたいと話していた。しかし、仕事を始めたいという女性ほとんどいなかった。

一方、サッキヤなどの高位カーストのミサ・プツァでは、「祭」に料理店を出して参加することに興味を持っているように感じた。忙しい女性が多く、「マイクロ・ファイナンス」については、会計をボランティアでやらなければならないし、面倒であると考えた女性もいて、あまり積極的ではない。また、高位カーストでは、融資を受けるのは恥ずかしいことだと考える女性が多く、融資を希望する時はミーティングで名乗り出るのではなく、リーダーにこっそりと頼むという。

また、農民カーストでは自分の家庭の問題をミーティングで語り、相談にのってもらおうという傾向が強いのに対し、中高位カーストでは自分の問題を

ミーティングのように全員に知れ渡るような場では語らないのだという。

4-3 ミサ・プツァの女性たちがネワール社会にもたらした影響、変化

ミサ・プツァにおけるマイクロ・ファイナンスのシステムそのものはいまだ未熟で、本来の機能は果たしていない。一方、ミサ・プツァによって形成されたネットワークが、相互扶助のルートとして機能している。ミサ・プツァのメンバーが、職業訓練を受け、融資を受けて、個人で事業を始めるという例はまだほとんどない。職業訓練を受け、街でバザーを開くことで、女性のエンパワメントの兆しはある程度は現れている。が、むしろ、ミサ・プツァがパタンPatanaの女性たちに与えている大きな変化は、これまで家庭だけが主な生活圏であった女性たちが、地域の女性たちと知り合い、付き合うようになったことである。つまり、生活の場が拡大し、それによって彼女たちの生活が変化したのである。互いのメンバーの家に出かけていくようになっただけでなく、悩んでいる時には精神面で支えになったり、病気などで困っている時には、病院に連れて行ってくれたり、色々な面で助けあうようになった。

生活世界が拡大する中で、女性たちは、伝統的な家族や親族に依存する生き方からある程度自立をし、有志でつくったグループの仲間による相互扶助を形成しつつある。今まで相互扶助は親族間においてのみ行われていた（それも核家族化によって範囲が狭まっていた）が、ミサ・プツァによって、新たな人のネットワークが生まれ、親族に代わって相互扶助の役割をも果たすようになったのだ。

また、従来、「ダサイン」などのヒンドゥー祭では、公の場には女性は出ず、男性によって儀礼が行われていた。しかし、ミサ・プツァのメンバーはバザールに出店したりして、女性たちが社会で共同の事業を始めるという新しい活動が生まれたことも大きな変化である²²。女性は家の中に居るべきだという伝統的な「ジェンダー構造」がミサ・プツァの活動を通して変化しつつあるのである。

22 ダサイン祭での伝統的な女性の役割とミサ・プツァによる新たな活動、およびその意義については別稿で論じた（竹内 2007, 印刷中）

CDS 主催のミサ・プツァ大会では、女性たちはカーストを超えたスタディ・グループをつくり、一日一緒に活動する。これは今までの常識では、絶対不可能なことである。ミサ・プツァ大会でカーストを超えた世界で活動したことで、女性自身のカースト意識や伝統的な価値観が揺らいでいる。浄不浄観念に基づいたカースト制度の枠組みからすれば、逸脱行為である。勉強への欲求とミサ・プツァの活動が、伝統的な「カースト構造」をも変化させる兆しが見えるのである。

ミサ・プツァの活動は、今後も継続していけば、トレーニングやマイクロ・ファイナンスがもう少し本来の機能を果たし、女性の起業や雇用形成に役立つ可能性があるかもしれない。しかし今のところ経済面ではそれほど目立った成果をあげているわけではない。カースト集団「ジャーティ」は職業別集団であり、女性が自由に職業に就くという考え方はネワール社会一般にはなかなか根付かない。全体として、ミサ・プツァの影響は、「開発」という面からだけ見れば、目覚しい効果をあげていないように見える。しかし、女性たちの生活に与えている影響は大きい。こうした動きは、パタンのネワール女性たちの生活を大きく変えるだけでなく、ネワール社会そのものの伝統、とくに「ジェンダー構造」や「カースト構造」に変化をもたらす可能性をも有しているといえよう。

5 むすび

本論文では、ミサ・プツァをめぐって、女性たちが伝統的な社会の中で新たな生き方を模索する過程を明らかにしてきた。ミサ・プツァは、外からの視点で見ると、女性のための開発プロジェクトである。従来の「開発」論では、「マイクロ・ファイナンス」、「職業訓練」、「エンパワーメント」などのキーワードによって、経済的・社会的な自立という面が強調される傾向が強かった。しかし、調査を進めるにつれ、筆者の中では、ミサ・プツァを「経済社会開発」の側面だけで理解することはできないという考えが強くなった。なぜなら、女性たち自身が望むものは、「マイクロ・ファイナンス」でも「エンパワーメント」でもなく、それよりも「友達を得ること」、「メンバー同士の親睦や共同作業」、「相互扶助」などだったからである。彼女たちは、ミサ・プツァをむしろ「サー

クル」のように捉えているのである。

ネパールにおけるマイクロ・ファイナンスは、1994年からグラミン銀行をモデルとして導入され、農村部の最貧地域を中心に国際機関（UNDP、IFAD等）やNGOが実施してきた。しかし、筆者の調査した5つの「ミサ・プツァ」は外部からの援助を受けていない。伊藤と田中は「参加型開発」の事例の一つとして、バディケル村で、ネパール政府主導型の「女性のための小規模融資事業」（Micro Credit Project for Women）の開発プロジェクトについて調査を行っている²³。筆者の調査したミサ・プツァは、パタン都市部の女性たちの自助組織であり、バディケル村の農村女性のためのプロジェクトとは異なる。ミサ・プツァの女性たちは、独自にマイクロ・ファイナンスを行っているが、まだこのシステムは本来の機能を果たしているとは言えない。彼女たちは、「マイクロ・ファイナンス」を女性たちはミサ・プツァの会費のように考えていて、ほとんどの女性は融資を受けることを期待していない。また、仲間が集まって何か共同の活動をすれば、その活動はどんなものであってもよいようにみえた。つまり、パタンにおいて、伝統性と保守性が極めて強い社会の中で家庭に囚われてきた女性たちが、ミサ・プツァに加入し、家庭の外へ出て、地域の女性たちと親しくなり、「生活世界の拡大」をしたことが、最も意義深い変化であった。そうした派生的活動の結果によってネパール社会にジェンダー構造の変化が生じていることが重要であった。

従来の経済開発のみの発想に対して女性の立場から意義申し立てが起こり、近年は「開発」における「ジェンダー」の視点が強調されてきた。さらに、「女性は男性に比べて特に、地域社会のジェンダー構造に埋め込まれた形で生産・生活が営まれており、現実の労働の状況は千差万別であるが故に、まず始めに地域社会ごとに異なる労働とジェンダーのあり方を把握することなしに、一般化した形で女子労働を評価したり、労働を通してのエンパワーメントを論じることはできない」²⁴ というように、地域独自のジェンダーの理解を求める考え方も出てきた。

23 伊藤、田中 1999: 199-206

24 谷口 1997: 232

本研究を通じて、地域独自の文化の全体像や女性たちの価値観を内側の視点から把握することの重要性を再認識した。本論文では、伝統が蓄積され保守性の強いネワール社会の中で、女性がどのようにして新しい生き方を模索しているのか、という問題意識から出発した。文化人類学的な参与観察の方法をとった研究の過程で、「開発問題」に出会い、ミサ・プツァをめぐる女性の生き方の変容に焦点を当てることになった。女性の生活、社会、文化、価値観などの包括的な理解があって、はじめて「開発」プロジェクトがどのように機能しているのかが理解でき、女性の新しい生き方の理解も可能となった。そして、女性たちが新しい生き方を実現するための新しいチャンネルとして「開発」をうまく利用してきた実態をとらえることができた。本研究を通して、筆者は「開発」と「ジェンダー」を人類学的な視点から研究することの意義を学んだように思う。

資料1 パタン市におけるネワールのカースト区分 (マハラジャン, ケシャブ・ラル 2002:p35)

カーストの位	ネワール語名称	儀礼上の役割	カースト的職能・代表的職業	含まれるタル (苗字)
上位グループ	パレ・グバジュ	仏教の僧侶・司祭	金細工、大工、石細工	バジュラチャリヤ、サキヤ、サキヤ・ピクチュ、バダ、ダクア、サキヤ・ムニ、アナガリク、
	デョバルム	ヒンドゥーの司祭		ラジョパデヤ
	セショー	占星術師、ヒンドゥ教司祭	旧支配層、商人、行政官	ズーシー、マッラ、アマテ、シュレスタ、ラジバンダリ、バイデ、ムルミ、マレク
	ジャプ	一部大衆神の司祭	農民、屋根葺き	マハラジャン、ダンゴル、シン
			土器作り、大工	アワレ、ブラジャパティ、クマレ
			同細工、菓子作り	タムラカル、シルパカル、プラダン、カルマチャリヤ、
			真鍮細工、	ラジカルニカル、バハネカル、バラヒ、シカルニ
中位グループ	クサー	ナエの司祭	農業、機織、米屋	タンドゥカル
	テペ		農業	ベンジャンカール、サンガ
	ブン		お面作り	チトラカル
	チバ、バー		染め屋	ランジトカル、カランジト
	サエミ		油絞り屋	マナンダル
	ガトゥ		園芸、花屋	マリ、マラカル
	ナウ	散髪、爪切り	散髪屋	ナピト
	カウ		鍛冶屋	ナカルミ
	クル		太鼓作り	クル
	ドビ		洗濯屋	ドビ、ラジャク
下位グループ	ナエ	太鼓たたき、へその緒きり、中位カーストの爪切り	肉屋、牛乳屋	カダギ、サヒ、カサイ
	ジュギ	笛吹き、不浄と浄化 一部大衆神の司祭	仕立て屋	カバリ、ジュギ、クスレ、 ダルシンダリ
不可触民	ポー、チャムカラー	不浄を浄化、町界域母神の司祭	漁夫、掃除屋	ポデ、チャメ

参考文献

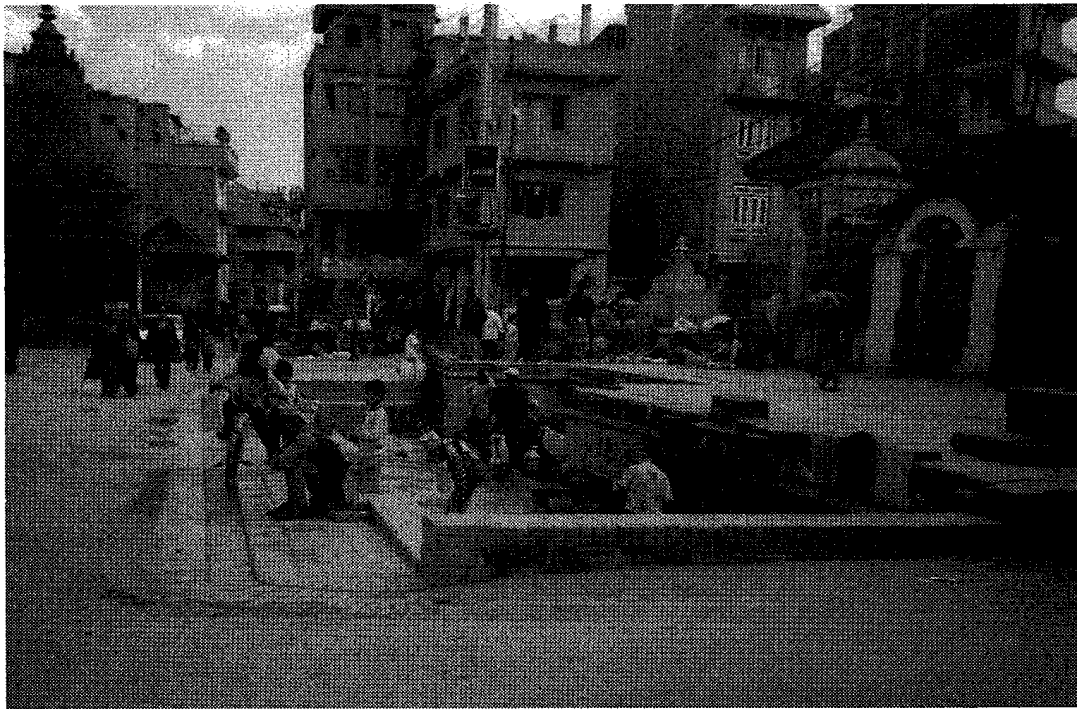
- 石井溥 1976a 「ネワール村落における家族 ネワール村落調査報告 - 3」『アジア・アフリカ言語文化研究』12 巻 pp139-170
- 石井溥 1976b 「ネワール村落におけるカースト内組織—phuki と sana guthi—」『民族学研究』40 巻 4 号 pp271-298
- 伊藤るり, 田中由美子 1999 「『参加型開発』と低所得層農民女性の自助集団化—ネパールの事例を中心に」国立婦人教育会館編 1999 『女性のエンパワーメントと開発: タイ・ネパール調査から』 pp187-223
- 伊藤真知子 1999 「ネパールにおける女性のエンパワーメントと家族—所得創出プロジェクト参加女性の調査を中心に—」国立婦人教育会館編 1999 『女性のエンパワーメントと開発: タイ・ネパール調査から』 pp225-269
- 竹内愛 2007 (印刷中) 「ネパールの『ダサイン』祭におけるネワール族のジェンダー構造変革の兆し」名古屋大学国際言語文化研究科国際多元専攻編『多元文化』第7号
- 谷口佳子 1997 「『開発と女性』における労働とエンパワーメント—女性の労働をどう考えるか—」大塚信一編『反開発の思想』岩波書店 pp231-250
- 山上亜紀 2001 「ケガレにまつわる観念とその諸相—ネパール・バフンの視線—」『成蹊人文研究』9 号 pp111-155
- 山田英美, 小林絵里香 1997 「ネパール女性のライフサイクル (Ⅱ)」『山梨大学教育学部研究報告』第1分冊人文社会科学系 pp265-275
- マハラジャン, ケシャブ・ラル 2002 「カトマンズ近郊の都市フロンティア—パタン市の街形成を事例に—」『三田学会雑誌』95 巻 2 号 pp221-240
- A charya, Meena 2001 “Women and the Economy: The Key Issues” in Manandhar, Laxmi Keshari & Bhattachan, Krishna B (eds.) *Gender and Democracy in Nepal* Home Science Women's Studies Program Tribhuvan University
- Sapana Pradhan-Malla 2000 *Discriminatory Laws in Nepal and Their Inmact on Women: A Review of Current Situation and Proposals for Change* Forum for Women, Law and Development
- Singh, Gopal 1988 *The Newar Himalayan Booksellers*
- <http://www.undp.org.np/publications/beijing5/chap02.htm> (2005, 9, 25 現在)
- HYPERLINK "http://www.ide.go.jp/Japanese/Ideas/Grad/wt_0408.html" http://www.ide.go.jp/Japanese/Ideas/Grad/wt_0408.html (2005, 9, 30 現在)

付記

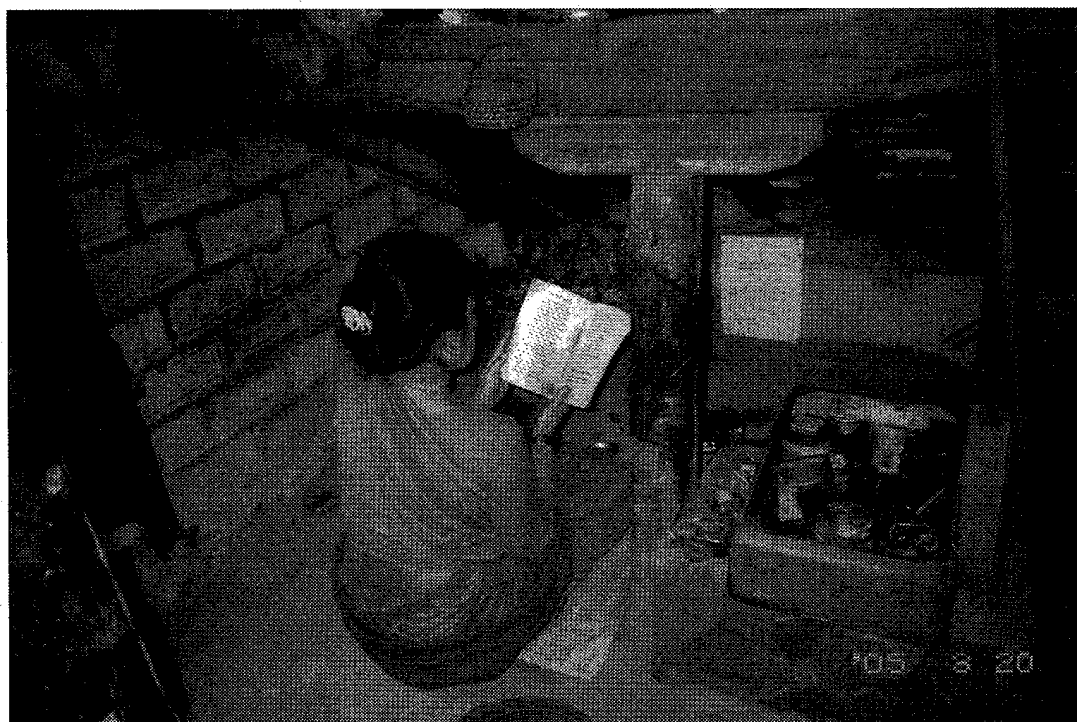
本論文の一部は松下国際財団研究助成金によって平成 18 年 10-11 月に行ったフィールドワークの成果です。

資料写真

1 パタン市内のヒティ（共同水道）



2 家の中で行う女性によるプジャ（祈り）



3 ヒランニャ・ミサ・プツァの活動



4 プルチヨーク・ミサ・プツァのメンバー (中央は筆者)

